

はしがき

本書は北九州市立大学外国語学部国際関係学科が2011年に公刊した『国際関係学の第一歩』の続編である。前著は大学1，2年次生のほか国際関係学専攻を目指す高校生や国際関係に関心をもつ社会人を対象とし，国際関係論が扱う問題の幅広さや考察のポイント・分析視点を紹介するために，執筆者がそれぞれの専門分野にひきつけて多様な国際社会を論じた。

その続編となる本書は，大学の授業で副読本として用いることを想定している。読者層は前著と同じく，国際関係に関心をもつ高校生から社会人まで幅広い層を設定している。それゆえ，できるだけ難解さを排除し，前著よりも平易かつ丁寧な記述を心がけた。

前著との大きな相違点として，本書は「街頭の政治」という各章共通のテーマを設定した。率直に言えば，限られた紙幅で全体テーマを設定すれば，執筆者それぞれの専門分野において紹介したい基礎的な概念や専門用語を取り入れることができなくなる恐れがあった。それでもこのテーマにこだわって編纂した理由は2つある。ひとつは，国際関係学の入門書は巷間にあふれており，その中で本書の独自性を明確にするためである。いまひとつはより重要な理由で，2010年代に世界各地で，選挙や議会などの制度的な経路に依らずデモや座り込みなどの手段で政治的目的を達成しようとしたり，自分たちの要求を社会に訴えようとしたりする行動が頻繁にみられたことである。こうした運動の世界的な拡散は，学生運動や社会運動が吹き荒れた1960年代を彷彿とさせたが，21世紀ならではの特徴も備えていた。執筆者たちは全員が「街頭の政治」を専門に研究してきたわけではないが，各地で頻発する「街頭の政治」から目を背けることができない，研究者としての強い関心を共有していた。それぞれの専門分野あるいは専門分野に近いところで発生している「街頭の政治」をどのように理解し，自分の研究と関連づければよいのか，それをどのように学生や市

民に伝えていけばよいのか、各自が常々向き合ってきた問題であったからこそ、このテーマを設定することで意見がまとまったのである。

本書を読み始める前に、「街頭の政治」について読者の皆さんとイメージをすり合わせておこう。世界各地の街頭で繰り広げられた活動の中で日本のメディアが大きく取り上げたものとしては、例えば、2010年にチュニジアのジャスミン革命に始まった「アラブの春」、翌年にアメリカで発生した「ウォール街を占拠せよ (Occupy Wall Street)」、2014年に台湾で学生たちが立法院を占拠した「ひまわり学生運動 (太陽花学運)」、本書でも取り上げた香港の「雨傘運動」などを挙げることができる。実際には、外国のメディアがいつせいに報道し始めるのは運動がピークにさしかかってからのことが多い。運動の本質を理解するためには、その前兆となる変化や、運動が社会にもたらした帰結を合わせて考える必要がある。また、街頭で繰り広げられた活動は一過性の事件として完結することは少なく、その後も形を変えて継続している場合が少なくない。国際関係は変化の予測が困難なダイナミズムを常に内在させているのである。

日本でも、2011年3月の東北大震災で福島第1原発事故が発生したことをきっかけに脱原発を提唱する運動が活発化し、主婦やサラリーマン、学生など、これまでデモとは無縁であった人々が集会や署名運動に参加する現象が顕著になった。また、2013年に特定機密保護法案が参議院で可決されると、学生団体 SEALDs が結成され、彼らを中心に全国各地で安全保障関連法に反対する街頭デモが繰り広げられた。これらのデモは1960年代に過激化した社会運動とは異なり、平日の夜や週末など勤務や就学に支障が少ない時間帯に行われ、途中参加や中途退出も咎められず、ラップ音楽を取り入れるなど娯楽イベントに近い様相を見せた。こうした活動は政権の政策や対応を批判したものの、特定の政治的イデオロギーに強く傾倒しなかったことで、人々は気軽に参加できたのである。

国内外の「街頭の政治」は、目的も発生場所も異なっていたが、2010年代に発生した運動にはいくつかの共通点もみられた。例えば、経験を重ねた社会運動家ではなく若い世代が中心となっていたこと、運動拡散や情報伝達的手段と

して若者が慣れ親しんだソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）が重要な役割を果たしたこと、リーダーが複数もしくは不在の運動が多かったこと、非暴力を貫いたことなどである。世界各地で頻発した「街頭の政治」は、国境の中で起こったものであれ、越境して発展したものであれ、グローバル化の進展と無関係ではない。このような現象に直面した執筆者たちは、各自の専門分野で学問的に、あるいは自らとのかかわりにおいて「街頭の政治」をどのように位置づければよいのか思案してきた。ある者は歴史的な観点から現代を理解しようと試み、ある者は特定の現象を掘り下げて考察し、ある者は現象の越境性に注目した。執筆者たちの思考の経路や結論を取りまとめたものが本書である。

本書の出版計画が持ち上がってから公刊に至るまで、約3年の月日を費やした。この間、学科の教員4名が編集委員会を立ち上げ、テーマを設定して企画案を作成し、出版計画を進めながら、2015年以降、数回にわたり研究会を開催した。研究会を始めてみると、学科教員の間で「街頭の政治」に対するイメージ・定義・問題意識の違いが鮮明になった。教員同士が時間をやり繰りしながら議論を重ね、お互いの距離を縮めていく作業は、決して容易ではなかったが、振り返ってみれば多くの知見を得ることができた、極めて生産的な時間でもあった。テーマの性格上、最終的に執筆を担当したのは専門分野が社会科学と深いかかわりをもつ研究者が中心となったが、本書は国際関係学科の全教員による研鑽の賜物である。

本書の執筆に先立ち、編集委員4名とそのゼミ生たちは、2015年秋に若者の政治意識と政治参加について学ぶ合同ゼミを実施した。若者は政治に関心が無いといわれて久しいが、若者が牽引した街頭デモや18歳選挙権の実現など、時代は若者が自分たちの未来創生に積極的にかかわる機会を用意していた。合同ゼミの成果は、北九州市立大学特別研究推進費の助成により、篠崎香織ほか編『政治は未来をどう創る？——身近にある政治、身近になる政治、身近にする政治 北九州市立大学外国語学部国際関係学科合同ゼミワークショップ&シンポジウム記録』北九州市立大学外国語学部国際関係学科、2016年にまとめられた。

このように本書は、執筆陣の協力に加え、教員と学生との共同作業や北九州市のコミュニティづくりにかかわっておられる多くの方々のご理解とご協力で支えられて完成した。また、約3年にわたり辛抱強くわれわれの執筆と編集作業を見守り、適宜必要なアドバイスをしてくださった法律文化社の舟木和久氏のご尽力がなければ、本書の公刊は実現しなかった。関係の皆様のご支援に深く感謝する。

本書は三部構成である。第I部を構成する3つの章は、一般に議会制度や民主主義の理念が最も発展していると考えられているイギリスやアメリカで、なぜ「街頭の政治」が頻発するのか、それらがどのような帰結を迎えて今日に至っているのか、歴史的な観点を交えて描く。英米で繰り返される「街頭の政治」を通じて、読者は制度運用の恣意性と民主主義の脆弱さについて考えざるをえないだろう。第II部を構成する3つの章は、多様な歴史文化を背景に、植民地主義と冷戦の残滓を引きずりつつ国家や地域のアイデンティティと民主を模索し続ける東アジアの「街頭の政治」を描く。読者は、韓国、中国、東南アジアで展開される「街頭の政治」に、権利の追求と統治の論理との相克が投影されていることに気づくであろう。第III部を構成する4つの章は、それぞれグローバル化との関連性が強い「街頭の政治」を描いている。環境問題、多国籍企業の活動、EUのような超国家機関、NGOの活動など、国家中心の国際関係論の枠組みでは扱いきれない重要な問題が議論される。読者は、国家以外のアクターによる活動の限界と可能性について知見を得るであろう。

当然のことながら、本書で取り上げた「街頭の政治」は世界各地で発生したものの一部にすぎない。限られた事例であることをふまえながらも、人々がなぜ街頭に繰り出さねばならないのか、なぜ制度の枠組みでは問題解決が難しいのか、街頭に繰り出したことが成功につながったのかあるいは失敗したのか、成功と失敗はどのように判断されるのか、そして街頭での異議申立ての後に運動や参加者たちはどうなったのか。こうした観点を忘れずに読み進めていただきたい。

本書で取り上げた「街頭の政治」は、現在も継続していたり、形を変えて存続していたりするものが少なくない。「街頭の政治」は正に我々の時代の物語

である。本書の議論を入り口として、読者の皆さんが国際関係学や地域研究に関心を持ち、自ら学ぶ姿勢を養ってくださることを願ってやまない。

2018年2月10日

編 者